

波濤図

永観堂釈迦堂の両側 12 の内壁には、美術界の巨匠の一人であり、桃山時代（1568～1600）を代表する絵師長谷川等伯（1539～1610）の作品が一時期飾られていた。長谷川等伯の代表的な作品は、水墨の使用と中国風の絵画（漢画）からの強い影響が特徴である。等伯の初期の作品は色彩豊かな画風であったが、やがて希釈された墨のみを使用するミニマリズムを好むようになり、単色調方法であるにもかかわらず色彩感覚を呼び起こすことができることで特に賞賛されている。

中国風の筆法と金箔の雲の繊細な組み合わせは、等伯作品の特徴で日本画の「大和絵」を想起させる。「岩と波」（波濤図）のモチーフは桃山時代に非常に一般的であった。同様の作品は長谷川派の他の絵師たちによって制作されたが、これは等伯自身が制作したと知られている唯一の作品である。

画は現在掛け軸に再生されたが、絵は当初、釈迦堂の襖に描かれていた。座して目の高さで岩にぶつかる激しい波濤の動きは、室内の静寂さとの鋭い対照をなしている。